自立支援特化型高齢者デイサービスにおける レクリエーションプログラムの再考

―大学生との世代間交流の効果に着目して―

朝倉　和子[1]　山岡　義卓[2]　西口　守[1]

介護保険制度の施行により、高齢者福祉は措置制度から契約へと転換が図られ、様々なサービス事業者が参入してきている。その中で利用者の求めるサービスに応じるために、独自のサービス、特性を持った事業者が増えてきている。

本研究では、リハビリテーションの特化という独自性を持った、自立支援特化型デイサービス事業者に協力を依頼し調査を実施した。本施設は、リハビリテーションを中心とした支援で利用者からの満足度も高いものであったが、リハビリテーション以外のサービスについて改善を必要としていた。その様な中で、さらに心地よいサービス提供と世代間交流を目指し、大学生によるレクリエーションプログラムの作成と提供を試みた。

課題として、世代を超えたプログラムを提供する中で、多くの人生経験を重ねてきた高齢者の人生段階にふさわしいサービスの提供の困難さと、高齢者の自発性と尊厳を重視した支援の具体化の困難性が挙げられた。

キーワード：高齢者　自立支援型デイサービス　レクリエーション　世代間交流

1．はじめに

我が国では老親の介護は、子育てと同じように家族が宿命的に背負わなければならないとする傾向があった。しかし、2000年度に施行された介護保険制度は、家族をその呪縛から解放し、高齢者の介護を社会全体の課題として位置づけた。介護保険制度が始まり13年が経過した現在、要介護者の介護者を見たとき、その6割以上が同居している人であるという現実もあるが、要介護認定者は2013年1月審査分で約446万人と介護保険制度が以前に比べ周知されていることが分かる。そして、制度利用者の増加は、介護保険制度設立の目的であった介護の社会化が一定の評価を得てきていることを示している。

しかし、一方、介護給付費の増大は当初の予測を超えていて、介護保険制度の持続可能性にも疑問がなげかけられている。

この中で特に、通所介護の給付費の伸びは大きく、そのサービスの効果についても検討を迫られている。この様な中で、通所介護のサービスにも変化が見られてきている。その代表的なものとして、リハビリ特化型、あるいは自立支援特化型のデイサービスの出現がある。本来、リハビリサービスは、通所リハビリの中で行われるのだが、医師の必要性の条件などの障壁もあり、理学療法士を中心として、通所介護の中でリハビリに特化した自立支援型のサービスが重視されている。

このサービスは、今までのデイサービスにありがちな「幼稚性」ゆえに敬遠していた男性の利用

1 東京家政学院大学現代生活学部人間福祉学科
2 東京家政学院大学地域連携・研究（町田）センター
神奈川大学経営学部国際経営学科

掘り起しに成功し、新たな顧客層の開発にもつながっている。しかし、リハビリ特化型といってもサービス時間のうち、リハビリの提供時間は少なく、それ以外の多くの時間をどのように過ごすのかが問われている。

この様な状況の中で、本研究はデイサービスにおけるレクリエーションの充実を課題としているWデイサービスセンターと東京家政学院大学現代生活学部人間福祉学科、多摩大学経営情報学部の学生との共同プロジェクトとして実施した。

2．研究の目的

Wデイサービスは東京都内に所在し、リハビリテーションに特化した高齢者デイサービスであり、理学療法士による専門的なリハビリを提供している。利用者の多くは日常生活動作（ADL）が自立しており、リハビリを目的に通所している。しかし、リハビリ活動には体力的にも制限があり、リハビリの時間は限られている。リハビリ以外の時間を如何に有効的なものとするかが課題となっていた。さらに、その内容は人生経験豊富な利用者にふさわしいものであることが望まれた。その様な中で、専門の異なる大学間にて学生を中心とした新たなサービスの構築を目的に実施した。

3．方　法

Wデイサービスにて、学生が作成したプログラムを実施した。実施するにあたっては、参加協力利用者を施設職員に選定をしてもらった。

【実施期間】

第Ⅰ期　2012年５月～2013年３月。

第Ⅱ期　2013年５月～2014年２月。

【プロジェクト参加学生】

第Ⅰ期：東京家政学院大学４年生３名、多摩大学３年生２名、１年生１名。

第Ⅱ期：東京家政学院大学２年生２名、１年生４名、多摩大学３年生３名。

4．倫理規定について

プロジェクト実施に伴い、Wデイサービス、東京家政学院大学、多摩大学の三者間にて「共同プロジェクトの実施に関する覚書」（以下覚書とする）を交している。

プロジェクトへ参加するWデイサービスの利用者には、Wデイサービスの職員から事前に説明を実施し、参加の同意を得ている。利用者の参加の同意と個人情報等の扱いは施設と利用者間での施設利用における契約の範囲内とし、個人情報については匿名の状態で必要最低限の範囲と内容にて職員より提供を受けている。個人情報を含む情報については覚書に基づき、確認をしている。

論文については事前に施設職員に内容の確認を得ている。なお、覚書に基づき、論文等における公表についても確認をしている。

5．結　果

（1）第Ⅰ期

主な活動スケジュールは表1のとおりである。

表１　第Ⅰ期活動スケジュール

５月６月	施設・教員事前打合せ
８月	全体ミーティング
８月中旬～	Wデイサービスにて実習実施。現状の把握
９月	Wデイサービスの所在地域におけるフィールドワーク
９月	大学間ミーティング
10月	Wデイサービス利用者へのアンケート調査、ニーズの把握。
10月	企画提案
３月	まとめ・Wデイサービスにて活動内容の発表

第Ⅰ期では学生が利用者と職員にヒアリングにて“デイサービスに求めるものは何か”を聞いた。ヒアリングから利用者、職員ともに、Wデイサービスではリハビリテーションが重要なポイントであると捉えていることの再確認と、レクリエーションにもリハビリテーションの要素を求めていることが明らかになった。そして、レクリエーションの在り方を学生と教員で考察した結果、３つのカテゴリーに分類した。以下に示す。

①　利用者が選択可能なレクリエーション

レクリエーション内容に豊富性と選択性を持たせ利用者の自己決定と意欲向上を目指す。

その内容は一人でも楽しめるもの、複数人で行うものと実施の在り方にも自由度を持たせ、利用者がリラックスできるものであること。そして、“のんびり”過ごす、何もしない時間があっても良いという発想から高齢者施設でも多々指摘があがっている強制的な参加を控え、利用者が過ごしたいように過ごすことを重視したレクリエーションを考えた。

②　リハビリテーションの要素を踏まえたレクリエーション

利用者が最も重視している部分でもあり具体的な身体面における改善や効果を本人が感じられるものを目指す。さらに身体的要素、社会的要素、知的要素に分類し、レクリエーションとリハビリテーションの相乗効果と効果の明確化を目指した。効果の明確化によって利用者の意欲の向上が期待できると考えた。具体的には習字等で正しい姿勢（身体的要素）で正しい文字書く（知的要素）ことや作品を通じてお互いの評価をし合う（社会的要素）等が挙げられた。

③　地域密着型のレクリエーション

利用者自身のリフレッシュ、視野の拡大を目指し外出をする。デイサービスのレクリエーションで作成した作品の展示をすることにより達成感を感じてもらう。さらに作品の展示から利用日の異なる利用者同士の交流も目指すといったことが挙げられた。しかし、外出には制度面からも好きな時に好きな場所へ行くといった自由は限られる等、課題も挙げられた。

第Ⅰ期は①～③のレクリエーションのアイデアの提案と施設、大学間における情報交換の時点で終了となってしまった。第Ⅰ期のヒアリング調査にて明らかになった“求められているレクリエーションは、リハビリテーションを中心としたプログラム、頭をつかったレクリエーションである”ということを元に第Ⅱ期は具体的なレクリエーションプログラムの具体化、作成を目標とすることとした。

（２）第Ⅱ期

主な活動スケジュールは表２のとおりである。

表２　第Ⅱ期活動スケジュール

５月	全体ミーティング
６月～	Ｗデイサービスにて実習実施。現状の把握
７月	Ｗデイサービスの所在地域におけるフィールドワーク
９月	各大学及び大学間ミーティング
９～11月	全体ミーティング
11月	Ｗデイサービスにてレクリエーションプログラムの実施（１回目）
２月	Ｗデイサービスにてレクリエーションプログラムの実施（２．３回目）

６月以降の実習にて学生による施設の現状の把握を実施し、レクリエーションプログラム作成に必要なことを各大学の専門性の立場から学生が意見を出し合った。本学科の“福祉の立場”と多摩大学の“経営の立場”である。

本学科の学生は福祉の立場からレクリエーションは利用者とスタッフが場を共有する時間と捉え双方が楽しめる内容であることが望ましいとした。さらに職員の人数が少なく、全ての利用者とコミュニケーションを取ることが難しい状態が垣間見えることから、コミュニケーションへの手助けとなるプログラムが必要であるとした。また、プログラムに参加をしたくない利用者もいるという現実から、無理強いはせず、自分の時間を有意義に使うことの重要性を挙げ、利用者へのアプローチの方法を十分に考える必要性を提示した。

多摩大学からは経営の立場から、求められているのは利用者がプログラムに合わせるものではなく、利用者の個別性とそのニーズに合ったプログラムであり、利用者の状態やニーズ把握のための学生同士の情報共有の重要性が挙げられた。そして、利用者の生活向上のためには、利用者に関わる人間それぞれの役割理解が必要であることが挙げられた。さらに利用者の一番の目的であるリハ

ビリテーションの効果向上につながるプログラムを考える必要性が提示された。

双方の意見交換から利用者それぞれの立場と施設全体を見ることの大切さと、利用者同士や職員とのコミュニケーションを重視した継続可能なレクリエーションプログラムの作成を目的とすることが確認できた。

以上を踏まえ、11月以降、各大学にてレクリエーションプログラムを作成しWデイサービスにて実施した。

（３）第Ⅱ期レクリエーションの内容と結果

レクリエーションプログラムのキーポイントとして１）自身の若いころを思い出すことによりリハビリテーションへつなげること、２）話題の提供をすることによって利用者同士のコミュニケーションの促進を図ること、の２点を基本においた。

具体的には参加の自由度と利用者の多様な介護状況へ配慮し、グループでの集団活動ではなく、リラックスして昔を懐かしいと感じることのできる映像や音楽を流し自由に観てもらう形式をとった。ただし、参加者同士のコミュニケーションの促進のために、各回のプログラムにテーマを持たせ共通の話題が発生するよう工夫をした。さらに、学生が実施するプログラムであることから、現在の若者の世界も同時に紹介し世代間の交流を図ることも重要な目的とした。

実施回数は2013年11月14日、2014年２月６日、２月20日の３回である。

参加、協力いただいた利用者の属性は表３の通りである。通所年数は11月14日時点で最長が17カ月、最短で４カ月、平均は10.1カ月であった。

プログラム終了後、参加利用者に感想を個別に聞き、さらに全体で自由に感想を述べてもらい次回プログラムへの改善へつなげていった。

≪第１回目≫

利用者に若いころを思い出していただくことを念頭に、利用者の方々の人生にて印象的であったと推測される社会の出来事を学生が進行役を担い1960年代～順々に映像と音楽にて流した。約30分のプログラムである。図１にレクリ―ションに使用したスライドの抜粋を示す。また、図２はレクリエーションを実施した学生の様子である。

表３　参加利用者の属性

	性別	年令	要介護度
A	f	81	要介護１
B	f	79	要支援２
C	f	85	要支援１
D	m	72	要支援１
E	f	72	要介護５
F	m	84	要支援２
G	M	75	要支援２
H	M	82	要支援１

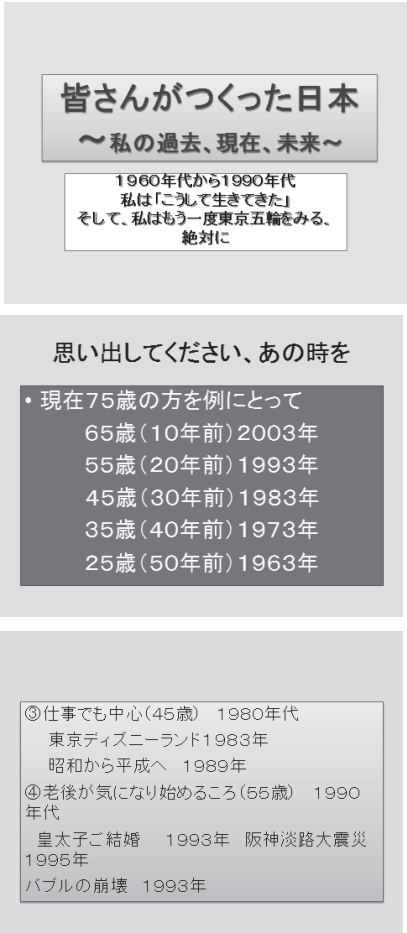

図１　第１回レクリエーションスライド（抜粋）

図２　学生によるレクリエーションプログラムの様子

年代ごとに具体的な社会的事例をあげ、利用者にその時代を振り返ってもらった。さらに2020年の東京オリンピック開催が決定した後ということもあり、1964年開催の東京オリンピックをポイントに過去を振り返ると同時に2020年東京オリンピックへ向けた将来的な思考も含む内容とした。

プログラム終了後のヒアリングでは、非常に懐かしかったという感想が多く、使用した音楽の歌手や映像に基づき、多くの会話が利用者間で持たれていた。しかし、時代設定が少し後ろ（利用者にとって若い）である、耳が遠いので聞き取り辛かった、見辛かった、といった意見もあった。時代設定については、自身の人生を懐古する際、ポイントのなるのは利用者各自の青春時代であり、利用者によっての時代設定が異なることへの対応が求められた。また、例として取り上げた人物や音楽が演歌ばかりであるとの指摘もあった。ジャズや洋楽が好きである利用者も多く、利用者の見識や世界の広さを知ると共に、我々の高齢者に対する画一的なイメージを反省することができた。

さらに、聴覚や視覚機能に困難がある利用者にとっては内容の把握が困難であることへの対応と、利用者間のコミュニケーションの増進が一番の目的であることから、プログラムにおける映像や音楽はあくまで補助的な位置付けであり、会話を優先した進行方法への工夫の必要性も挙げられた。

≪第２回目≫

プログラムの内容を明確化するため、テーマを第2回目は音楽に限定して行った。

音楽を中心にした第２回目では「歌謡曲を振り返る」とし、第２次世界大戦後からの代表的な歌謡曲をスライド（図３）と動画で流した。コミュニケーションの時間確保を重視するため、提示する映像等は少なくし、話題提供のために歌手についての情報を紹介する等、工夫を行った。また、代表的な馴染みの深い歌手の動画を中心に流すことによって、視覚的、聴覚的双方からのアプローチを試みた。プログラムの最中では利用者が動画と一緒になって歌う等和やかな場面が見られた。

東京ブギウギ/笠置シズ子(1948)

- 「青い山脈」「リンゴの唄」と並ぶ戦後の代表的歌謡曲である。
- 笠置シズ子は、「ブギの女王」として一世を風靡した。

上を向いて歩こう/坂本九(1961)

- 発売当時、日本での評判は芳しくなかった。
- しかし、のちに「SUKIYAKI」として世界中でヒット。
- 坂本九は、この曲で1961年の紅白歌合戦に初出場を果たした。

図３　第２回レクリエーションスライド（抜粋）

利用者からは、前回と同じく懐かしく楽しかった、曲が良かったという意見を聞くことができたが、実際に使用した曲の感想以外に「青い山脈やリンゴの唄といった曲を思い出す。その(時代の)前は軍歌ばかりで聞きたくない。」「ビートルズやカーペンターズも良い曲だと思う。耳なじみがある。」など様々な感想がでた。さらに、感想を出してもらっている過程で利用者が職員、学生へ自身の若いころの話をする場面もあった。具体的な内容は、昔は女性の靴下は高価であり修理して履いていた等、職員、学生、初めて聞くエピソードであったりと、時代の継承への効果も見ることができた。また、当時はラジオだったので、初めて歌手の顔をみたかもしれないという言葉もあり、動画等、現代ならではのツールの効果であった。

課題としては、男性の利用者への関わり方であった。参加はしてもらえたが、女性利用者のように積極的な会話への参加は見られなかった。男性利用者も有意義な時間を過ごせるプログラムの作成が課題として挙げられた。

≪第３回目≫

第３回目は映画をテーマとし、1950年代から現在の若者世代までの流行った映画（邦画、洋画）をスライド（図４）と動画（予告編など）にて紹介した。

有名な昔の洋画はそのテーマ曲も有名であり、利用者は音楽と共に楽しんでくれた。映画は男性利用者も関心を示してくれ、特に男性にも人気のあった映画の抜粋を観たあとは、自然と利用者間でも会話が進んでいた。映画の話をしながら「(あなたは)何年生まれ？」と普段あまり会話がなかったであろう利用者間での交流につながっていた。

「その時代を思い出しておしゃべりできるから楽しい」「(若いころ）映画はたくさん観た」「(大脱走を観て）バイクが流行っていた」など利用者、職員、学生を交えて会話が弾んでいた。一方、1960年代以降の映画は子育て等であまりなじみがないという意見があり、その当時のことを改めて振り返る場面もあった。

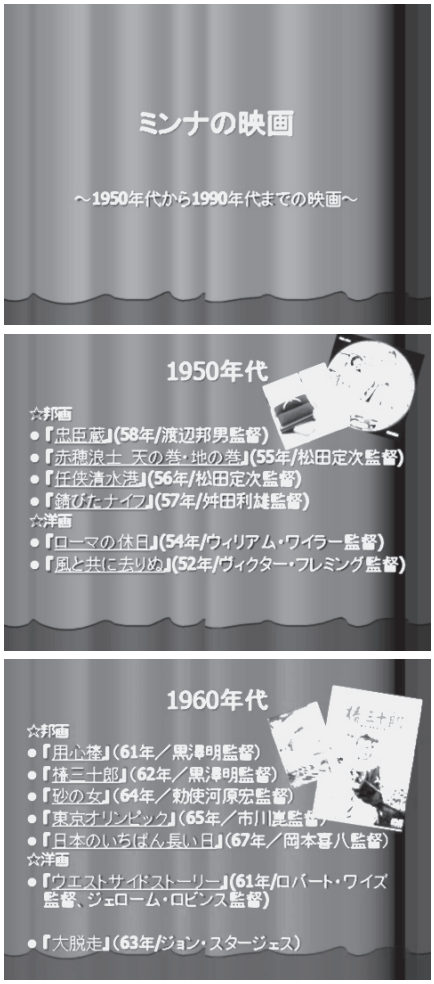

図４　第３回レクリエーションスライド（抜粋）

６．考　察

第Ⅰ期、第Ⅱ期の活動から、高齢者の方々の人生、歴史を垣間見ることができた。レクリエーションプログラムは決して利用者のみのものではなく、自然と学生や職員へと伝承の意味合いを持つものになっていた。

過去の社会的事柄を中心とした振り返り、音楽、映画とテーマを絞っての振り返りとプラグラムを実施したが、共通しての効果は“きっかけ作り”という役割を担えたことであった。利用者は出てきた映像や音楽についてだけではなく、その当時の様子、自身の経験を自己紹介のように話し、利用者同士でも初めて知るお互いの情報もあった。

青春時代を思い出し、とても懐かしいとの言葉にもあるように学生にとってはその時代背景を具体的に学ぶ貴重な時間にもなっていた。職員の方々もその場にいて、利用者の青春時代の話を通じ、利用者の方々の新しい一面を知るきっかけにもなっていた。本学科が目的とした利用者と職員が場を共有し楽しく過ごせる時間の提供という点では一定の効果があったと思われる。リハビリテーションの効果促進という面では、利用者が自発的に発言をし、コミュニケーションをとり、その場（社会）を構築していくという情緒的側面からの支援が、間接的にリハビリテーションの効果にもつながっていると考えられる。

利用者は若い世代に自身の経験を語ることによって、自身のこれまでの人生や存在意義を再確認し、若い世代は高齢者から様々な知恵や経験を具体的に学ぶことができる。核家族化が進む中、高齢者と係る機会が少ない世代にとって重要な意味を持つ。回想による知恵や経験の伝承としての世代間の交流は高齢者、若い世代に双方にとって有意義であり、高齢者施設内においても重要視されるべきものである。

また、今回、合計３回のプログラムを実施したが、回を追うごとに、「今日は何をするの」と利用者からの声掛けもあった。職員の方々から利用者への事前の説明のお蔭もあるが、利用者の方々も３回目では“積極的に楽しむ”という姿が見られ、継続の重要さを知ることができた。さらに、プログラムにおける年代の再考証のアドバイスや、利用者の方々が生きてきた“昭和”という時代の意味の考察、人生の背景を深く捉えていくことの大切さといった課題も利用者よりいただいた。

高齢者施設でのレクリエーションは、利用者の積極性、自発性、自由度を重視したものであり、その場にいる人々がお互いに学び合え、尊厳を感じられるものでなければならない。

７．おわりに

そもそも通所介護の役割とは、利用者にとっては他者との交流をとおしての社会性の維持向上であり、家族にとっては、休息であった。

この様な考え方はサービスプログラムの目的や目標を失わせ、ひいてはサービスの質の低下を招いてきたことも事実としてある。

2010年10月28日の朝日新聞朝刊生活面には次の様なタイトルの記事が掲載された。『（ひととき）父の塗り絵に胸痛む』、これは父親を通所介護に通わせている娘さん（50代）からの投書である。「父の塗った塗り絵。Ｂ４版ほどの大きさの紙の真ん中に大きなキノコが二つあるだけ。認知症で要介護１の認定を受け、先日デイサービスを体験しに行った父が描いた「作品」です。見た途端、胸が締め付けられると同時に激しい憤りを感じました。…80年生きてきた者の誇りを傷つけるものとしか思えなかったのです。…父は、自らの意思でサービスを利用すると言っています。まるで幼稚園のようだ、と不満を口にしながら。これからは、これでよかったのかという迷いと申し訳なさと哀れさと、そして怒りで胸をいっぱいにしながら毎週、送迎バスを見送るのでしょう。」（一部抜粋）

この様な中で、目的も効果もある程度はっきりとした自立支援型、リハビリ特化型のデイサービスが登場するのだが、リハビリサービスの提供以外の時間が従来の福祉サービスのような子どもじみた活動に終始しているという批判のなか、今回の様に若者が関与しながら、リハビリと連続性を持った、大人が楽しめる、大人のサービス内容を検討してきた。

今回の成果としては、二つのことを挙げることができる。

（１）世代間の交流促進

今日の社会保障制度は世代間の支え合いやつながりを基底として構築されており、このつながりが喪失することは、社会保障制度の根幹を揺るがしかねない。しかし現在、世代間の断絶は進み、異世代が共同して何かを成し遂げることが少なくなってきた。

この様な中、今回の取り組みは異世代が共にサービスを作り上げていく過程そのものに意味があったと考える。

斉藤は「現代は、次世代が親世代の成果を“継承しつつ生成し、生成しつつ継承する”という世代サイクルの形成がなされていない[1]」という。この継承と生成のサイクルをデイサービスの場を

通じて明らかにした意義は大きい。

（２）つながりを自覚する

老年的超越の重要性を説いた高橋ら[2]は「高齢者は一見孤独な状況において可視化されない存在への親和性を感じていることから、“つながり”は老年的超越重要な要素」だと述べる。老年的超越は、心理的安定にとって重要な要素であるが、これを得るためにはつながりの経験が重要である。

今回の取り組みは、時代を縦軸にそこに展開された人間関係を横軸として紡がれてきたつながりを再認識することができた。

また世代間交流を通じて、次世代とのつながりも認識できたことは意味あることのように考える。

ダニエルF.チャンブリスはケアの向こう側、ナースの感情の平板化はルーチン化された仕事の結果であり、そのことがサービスの質の低下を招いていると指摘する。

我々はこの指摘を真摯に受け止め、改めて、ひとりひとりの歴史に寄り添う事こそが福祉サービスには求められていることを自覚したい。

謝　辞

本研究を進めるにあたって、ご多忙の中ご協力いただいた施設職員の皆様、そして、暖かく学生たちを見守り続けてくださいました利用者の皆様に深く御礼を申し上げます。

引用文献

１）藤原佳典著「プロダクティビティの視点からみた高齢者の次世代支援」草野篤子他編『世代間交流学の創造　＝無縁社会から他世代間交流型社会実現のために』所蔵　p 66　あけび書房　2010年

２）中川威他著『超高齢者の語りにみる生（life）の意味』　老年社会科学32-4　p 429　2011年

参考文献

１）『朝日新聞』2010年10月20日

２）澤田節子「高齢社会と高齢者像」『東邦学志』35　p12－15　愛知東邦大学　2006

３）信用中央金庫　地域・中小企業研究所「在宅介護を支えるデイサービス事業者－重要性が高まる自立支援へ向けた体制整備」『産業企業情報』25－13号　2014

４）千草篤磨「高齢者の回想と未来展望」『高田短期大学紀要』29　p7－16　高知短期大学　2011

５）ダニエルＦ.チャンブリス著　浅野祐子訳『ケアの向こう側＝看護職が直面する道徳的・倫理的矛盾』日本看護協会出版会　2002

６）内閣府『高齢者白書（平成25年度版）』2013

７）図３笠木シヅ子・坂本九　共にウィキペディア参照

８）図４ウィキペディア年度別日本公開映画参照

（受付　2014.3.26　受理　2014.6.2）